

## 世界が被災地の人々を見まもる

スマトラ沖地震・津波の被災地には、過去に前例のないほど数多くの国際機関や二国間援助機関、NGOが現地入りし、復興へむけて多岐にわたる支援を行ってきました。

訪問を通して現場の声とニーズを世界に向けて発信した人たちもいます。2005年1月にクリントン前大統領、4月に小泉首相、そして11月にはユニセフ議員連盟を代表して御法



インドネシア・アチェの子どもとふれ合う小泉首相：  
UNICEF/Josh Estey

川信英議員、山際大志郎議員、山内康一議員がインドネシアを訪問、ユニセフのプロジェクトを視察しました。キャロル・ベ



スリランカを訪問するアン・M・ベネマン事務局長と丹羽事務局長次長：  
UNICEF/HQ05-0858/Sebastian Posings

## ユニセフ・スリランカ事務所での活動

### 松岡秀明

アシスタント・プログラム・オフィサー  
(水と衛生担当)



スマトラ島沖地震による津波で、スリランカでは3万人以上が犠牲になったのははじめ、多くの家庭が家を失い、病院、学校などの公共施設や水道、電気などの公共インフラにも多大な被害が出ました。

水と衛生の活動において日本の支援金は、給水車、給水タンク、バケツ、滅菌用塩素、給水施設補修用の資材、バキュームカーなどの資機材を現地政府や被災地に供与したり、被災地での給水施設やトイレの補修や新設に充てられました。未だ仮設住宅に住んでいる10万人以上の人々が衛生的な生活を送れるよう、ユニセフでは現地政府やNGOと協力して啓発活動も行っています。これは、当初懸念された水系感染症の蔓延を防ぐにあたって大きな役割を担っています。

ラミー前ユニセフ事務局長と黒柳徹子ユニセフ親善大使も被災直後に現地入りしたほか、2005年5月に就任したばかりのアン・M・ベネマン新ユニセフ事務局長と丹羽敏之事務局長も6月には被災地へ応援に駆けつけました。



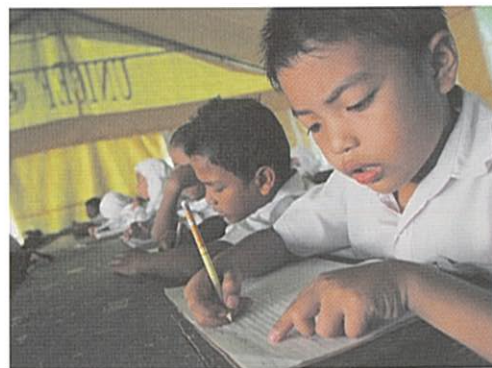
ユニセフ議員連盟の視察に参加した御法川議員、山際議員、山内議員、石田外務省職員、浦元ユニセフ東京事務所長、他ユニセフ職員。ジャカルタでの記者会見後に記念撮影：UNICEF

## これからの課題とチャレンジ

国際社会の支援と共に、被災地の人々は復興の道を着実に歩んでいます。子どもたちは学校に戻り、生活環境も整いつつあります。しかし、これは長い道のりの始まりに過ぎません。学校の先生やヘルスワーカーなど人材不足の問題は未だ深刻です。仮住まいの生活を続ける人々もたくさんいます。

いちばん大きな被害をこうむったインドネシアでは、2005年4月に復興再建機構(BRR)が設立され、復興基本計画を軸にプロジェクトが運営されています。また、同年8月には、インドネシア政府とアチェ州の独立派武装ゲリラ組織、アチェ自由運動(GAM)が30年にわたる紛争にピリオドを打ち和平合意文書に調印するなど、復興を加速するための環境も整備されつつあります。その一方で、長期にわたる紛争で取り残されてきたコミュニティとの間に新たな格差が生じないよう公平な支援をしていく必要があります。

復興支援にあたりユニセフが掲げる目標は、「被災以前より子どもにやさしい社会の構築(Build Back Better)」です。現地政府の復興計画のもと、ユニセフは他の支援組織・グループと協力し、復興の過程で取り残される子どもたちがいないよう支援しています。被災地の人々が自らの手で持続可能な発展を導き、「被災以前より子どもにやさしい社会の構築」を実現できるよう、ユニセフはこれからも活動を続けていきます。



テントの仮設教室で勉強、インドネシアにて：  
UNICEF/  
HQ05-0807/  
Josh Estey

ご質問・お問い合わせは下記まで

## 国連児童基金(ユニセフ)東京事務所

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70 UNハウス8階  
電話：03-5467-4431 ファックス：03-5467-4437

# スマトラ沖地震・津波緊急支援

ユニセフと子どもたちの1年の歩み

One-Year Achievements in Tsunami Emergency Assistance



インドネシアのバンダ・アチェ郊外に住む9歳のサフリサちゃん(右)。津波で両親を失い、今は仮設住宅で生活しています。今日は友達と近くのモスクまで遊びに来ました。

UNICEF/HQ05-0785/Josh Estey





インドネシア・アチェの港にて: UNICEF/HQ05-0341/Josh Estey

# 1年の成果

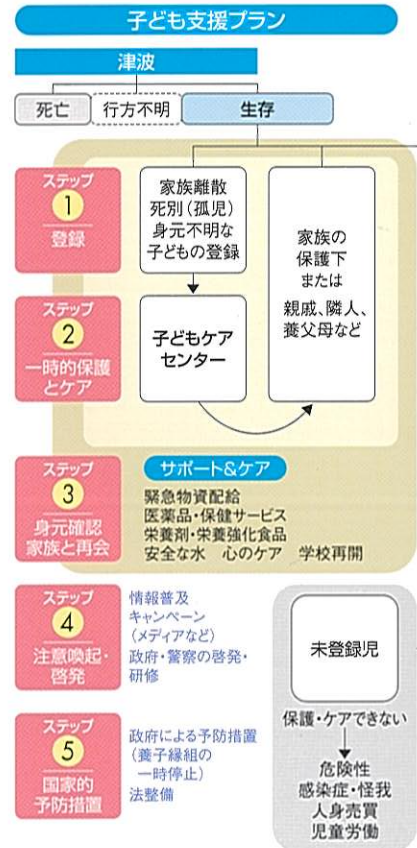
One-Year Achievements in  
Tsunami Emergency  
Assistance

## 日本とユニセフの協力

日本政府は被災地に対して、いち早く緊急支援活動を展開した国のひとつであり、その拠出額はユニセフへの7千万ドルも含め5億ドルと世界でも最大規模です。

被災からおおよそ1ヵ月後、子どもたちのおかれている惨状が様々な形で明らかになりました。日本政府は、災害で最も深刻な被害を受けた子どもを支援するため、「子ども支援プラン」を発表し、関係国際機関との協力を展開しました。「子ども支援プラン」の第一の柱は緊急物資の配布、保健・栄養サービスの提供、安全な水の供給など子どもの「生存」に必要なサポート体制の整備です。第二の柱は、親と離れ離れになった子どもの登録、家族との再会支援、人身売買からの保護、心のケア、教育の再開など、子どもを危険から「保護」するための活動です。ユニセフは子どもケアセンターや学校などを通して、これらの活動を包括的に実施しています。

また、子どもを対象とした麻疹予防接種キャンペーンでは、日本の自衛隊がワクチンや保冷資材の輸送に協力しました。日本のNGOとのパートナーシップとしては、ピース・ウィンズ・ジャパンやAMDAと組んで安全な水や保健サービスの提供など地域に根ざした支援を行ってきました。それぞれの得意分野を活かした協力が緊急援助の場においては不可欠であり、ユニセフも多くのパートナーと歩調を合わせて支援を展開しています。



## 地震・津波の深刻な被害

2004年12月26日に発生したスマトラ沖における地震と津波は20万人をも超す死者と行方不明者を出しました。そのうち3分の1以上が子どもと推測されています。被害は道路、学校、保健所を含むインフラ設備の深刻な破壊から、住居、農地、漁業関連などの個人資産の喪失、さらには家族やコミュニティ基盤の崩壊など広範囲に及びました。

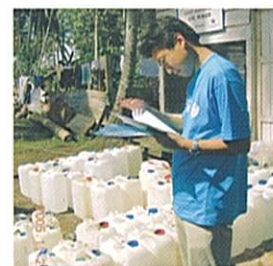
このような緊急事態では、子どもたちは特に脆弱な状況におかれます。親や兄弟を失った子どもたちの負担は精神的にも身体的にも大きく、また家族と共に生き延びた子どもたちでも学校や保健サービスへのアクセスがままなりません。その中で、ひとりでも多くの子どもの命を救い、人身売買などの潜在的な危険から子どもたちを守り、学校再開を含め少しでも早く日常の生活に戻れるよう子どもたちを支援していくことが急務です。

## ユニセフの緊急支援活動

ユニセフは津波発生以前から活動を展開していた現地事務所を足がかりに支援体制を確立し、12の被災国で人が人の搬送、緊急アセスメント、緊急物資(テント、飲料水、医薬品、衛生キット等)の配布、予防接種などを開始しました。コペンハーゲンにあるユニセフの物資調達センターでも、緊急物資の梱包と被災地に向けての発送を24時間体制で行いました。



UNICEF/HQ05-0044/Jeremy Horner



インドネシアでピース・ウィンズの水と衛生事業を視察する山内康一議員: UNICEF/Mihoko Nakagawa



自衛隊が支援する麻疹予防接種キャンペーンを視察する黒柳徹子ユニセフ親善大使: UNICEF/Josh Estey

## 子どものための保健サービス、教育、心のケア

被災から1年でユニセフは総額にして6億2600万ドルに上る支援を受け、およそ350万人の子どもと女性に手を差し伸べることができました。ユニセフは、これまで経験を蓄積してきた水・衛生、教育、児童保護、母子保健の分野において、他の援助機関やNGOの調整機能を担っています。

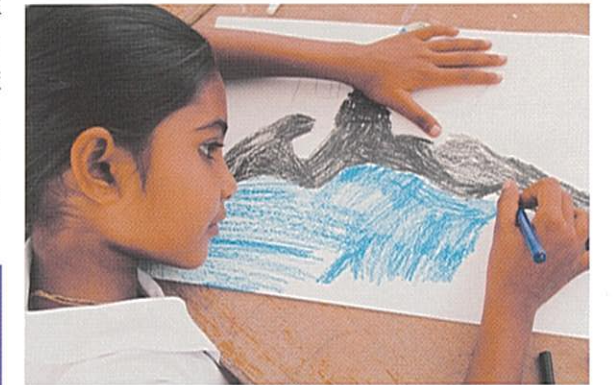


モルジブにてポリオ予防のワクチンを受ける乳児: UNICEF/HQ05-0254/Giacomo Pirozzi

ユニセフの保健・栄養チームは、麻疹予防接種キャンペーンの実施や緊急医療キット、マラリア予防のための蚊帳、下痢症の症状を軽減する経口補水塩、妊婦の貧血予防のための鉄剤の配付などを通して、多くの子どもや女性の健康ニーズに効果的に応えました。

保健・栄養

子どもの保護



特別訓練を受けた先生が見守る中でのセラピー活動: UNICEF/HQ05-0273/Giacomo Pirozzi

安全な水の供給と衛生設備の復旧は、感染症等を防ぐために重要な緊急支援項目です。ユニセフは、いち早く給水タンク、浄水剤、トイレ、衛生設備、家庭用衛生キット等の配付を行うと同時に、衛生的な行動を促進するための啓発活動を展開しました。

水・衛生

教育

子どもたちの教育を再開するための緊急支援戦略として、「バック・トゥ・スクール・キャンペーン(学校に戻ろうキャンペーン)」を実施しました。インドネシア教育省やその他の機関との協力のもとに配付された「スクール・イン・ボックス」には、学校再開に必要な筆記道具などの物資が詰められ、仮設教室として使われるテントの提供と合わせて、教育活動の迅速な再開に役立ちました。



インドの避難民キャンプにて: UNICEF/HQ05-0491/Ami Vitale



右から「スクール・イン・ボックス」と「レクリエーション・キット」: UNICEF/HQ05-0612/Josh Estey

ユニセフによる1年の成果	
麻疹予防接種を受けた子ども	120万人
マラリア予防の蚊帳を受け取った子どもと女性	50万人
仮設学校の建設	184校
学用品の支給を受けた子ども	140万人
登録や家族との再会支援を受けた子ども	3793人
津波によるトラウマで心のケアを受けた子ども	31万8千人

(2005年12月現在)

## 子どもたちの体験

ミンハズくん、15歳。「津波が来たとき学校はお休みで、屋根の修理をしていたんだ。水かさが増えて屋根によじ登ったら、そのまま家が崩れちゃった。はじめは木、それから流れてきた冷蔵庫につかまって、やっと避難した。家族は生き残ったけれど、津波で行方不明の友達がたくさんいるよ。こうやって自転車回って、がれきの中から使えるものを探しているんだ」



UNICEF/HQ04-0886/Shehzad Noorani

ハーシニちゃん、9歳。スリランカの首都コロムボから74キロ離れたコスガダ村に住んでいるハーシニちゃんの家族は何とか生き残りました。「でも、家もなくなっちゃったし、大事なおもちゃも何もかも津波でなくなっちゃったの」



UNICEF/HQ05-0051/Shehzad Noorani